Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

No.7　January 2007

〒467-8501　愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１番地　Tel　052－872-3452　Fax　052－872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

講演会「歴史・文化・自然を活かしたまちづくりと観光」報告

（主催：名古屋市立大学人間文化研究所共同研究プロジェクト「名古屋の環境・文化・まちづくりと観光に関する学際的研究」研究会、後援：人間文化研究所）

上記の講演会が 12 月 16 日（土）午後に学部棟 201 教室で行われた。観光をテーマにした特別研究奨励費、それと人間文化研究所共同研究プロジェクトの一環として、東京大学大学院工学系研究科（都市工学）の西村幸夫教授を招いて講演を企画した。

西村教授は『都市保全計画』という 1000 頁を超える大著を出版されるなど、都市計画の第 1 人者として活躍されている。今回の講演会のタイトルも、この大著の副題「歴史・文化・自然を活かしたまちづくり」を使わせてもらった。年末の寒い日にもかかわらず、大きな教室に延べ 100 名近い人が集まり盛況の講演会となった。今年度から始まった観光の受講生だけでなく、芸術工学部や卒業生、名古屋市などからも参加があった。公開講座や授業公開を聴講した人の参加も多かった。

講演のタイトルは講演会と同様だが、90 分間の講演はあっという間に過ぎていった。パワーポイントと写真をふんだんに使った講演であり、たいへん分かりやすいという感想が目立った。講演の詳細については『年報』に載せるとして、ここではポイントだけを記しておこう。

国レベルでも「観光まちづくり」という言葉が使われるようになった。「観光まちづくり」には、まちづくりが観光にまで至ったという面と、観光がまちづくりにまで拡がってきているという2つの側面がある。町が魅力的になり、住みたい町になることが重要だ。事例として城崎温泉、湯布院、金沢、田主丸（久留米）、高山、越後村上、石見銀山があげられ、「観光まちづくり」のユニークな取組みがビジュアルに紹介された。

論語の「近き者悦びて遠き者来る」を引用して、地域の住民が喜ぶことで人が観光に来て交流できる。観光まちづくりの真髄はそこにある、と述べて講演を締めくくった。

講演のあと、本研究科の服部教授と吉田教授のコメント、そして会場からの積極的な発言へと続いた。教授がじつに丁寧に質問に答えられたのが印象的であった。

質問への回答のなかで示唆に富む指摘だけを紹介しておこう。たいした魅力や観光スポットがないところは、どうするかという質問に対して。「個性のない人がいないように、個性がないまちはない。程度の差はあっても、何かしら個性はあるはず。歴史をたどれば、そのまちのストーリーが浮き上がるものだ。」

講演会を企画し司会をつとめた私にとっても、本当に勉強になり刺激を受けた 3 時間であった。とりわけ名古屋の観光まちづくりにも多くの示唆が得られ、調査研究への意欲をかきたてられた。　（人間文化研究科教授　山田明）

シンポジウム「越境文学の現況をめぐって」報告

（主催：名古屋市立大学人間文化研究所共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」グループ、後援：人間文化研究所）

2006 年 12 月 16 日午後 1 時半から 6 時半までの 5 時間にわたって、科研費「越境する文学の総合的研究」グループによるシンポジウム「越境文学の現況をめぐって」が開催された。沼野充義氏（東京大学大学院人文社会学系研究科教授）、今福龍太氏（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）、西成彦氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）、管啓次郎氏（明治大学教授）という、越境文学・文化研究者として第一線で活躍するパネリストを迎えて、コーディネーター役を土屋が行った。

まず土屋は、シンポジウムの趣旨説明の後、ドイツ語圏越境作家たちの現状について、トルコ系作家たちの文学活動を中心に報告し「国民文学」を変革する可能性を述べた。沼野氏は、言語的越境を、リモーノフやアクショーノフなど混ぜ合わせのマカロニ言語派、ナボコフやクンデラのような切り替え言語派、ブロツキーのような機能的な切り替え言語派、最後にドブラートフなど母語にとどまらざるを得ないグループなどに分けて考察した。また、冷戦後ソ連が崩壊した結果、境界の見直しが全面的に起こり、外部が消滅した今こそ新たなナショナリズム、境界を引きなおそうという動きが出てきていることを指摘した。次に今福氏は、そもそも文学は本質的に越境的であったというテーゼを立て、エリザベス・ビショフというアメリカ詩人の軌跡を追いながら、インターアメリカン、汎アメリカ大陸的な関係、反響としての様々な人物や土地を浮上させ、地勢的な想像力こそ文学的な空間であり、地理的な越境性、流動性に逆向きに入っていく視点が重要であるとした。西氏も、現代の越境文学に目を向けることとともに、過去の国民文学としての作品のなかに越境的なものを読み取ることが重要だと述べ、多和田葉子の『旅をする裸の目』を森鴎外の『舞姫』のパロディーと解釈した。また過去の独文学史のなかでは、民族主義的な国民文学ではない越境性が存在していたのであり、現代のドイツ越境文学の状況は、本来の正常な姿を示しているとする。管氏は、カリブ海文学の第一人者エドゥアール・グリッサンの『第四世紀』（1964 年）を取り上げ、アフリカ系島人のコミュニティのなかから現出した世界という関係の錯綜体を、全体性として捉えなおそうとした強靭な想像力の冒険であるとし、その最大の主題は、時間の空間化あるいは歴史の地理化というべき事態であり、線的な時間によって支配しようとする近代世界というシステムへの批判があると述べた。そして様々の言語が自分の傍らにあることを意識するグリッサンの多言語主義は「オムニフォン」と呼べるが、その理想は、理解不可能なものも含めて諸言語の共存を許す書字テクスト「オムニグラフィー」に見出せるとした。次に討論に入った。土屋と沼野氏が越境文学を論じる視点として、「母語以外で執筆する表現者」という定義を一応の前提とし、境界性を意識するのに対し、今福氏、西氏、管氏は越境文学の射程を広く捉え、文学自体が越境的であるという視座から出発する。さらに母語とは何か、越境とは何か、文学とは何かをめぐって白熱した議論が続いたが、紙幅の関係で省略する。当日の参加者数は約 30 名と少なかったが、4 名の個性豊かなパネリストを迎えて、熱心な参加者たちとの刺激的な質疑応答を含め、充実した文学的な時間を共有できたことを素直に喜びたい。なお、このシンポジウムの全記録は冊子としてまとめられる予定である。（人間文化研究科教授　土屋勝彦）

講演「多文化教育の現状と課題」報告

（主催：名古屋市立大学18年度特別研究奨励費「多文化共生時代における大学の役割」研究会、後援：人間文化研究所）

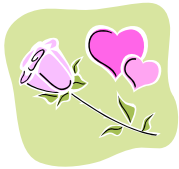
2006 年 11 月 9 日（木）に佛教大学・教育学部の田中圭治郎先生に「多文化教育の現状と課題」というテーマでお話いただきました。主催の「多文化共生時代における大学の役割」研究会としては、〈国際文化学〉という方向性のもとに行われている本学の諸研究を学校での国際理解教育と連携させる可能性を研究していますが、その一環として、国際理解教育や多文化教育について研究を重ねられてきた佛教大学の田中圭治郎先生においでいただきました。

田中先生はとりわけアメリカにおける多文化教育について長年研究されておられますが（参照、『多文化教育の世界的潮流』ナカニシヤ出版、1996 年）、今回の講演ではそれらを踏まえたうえで、日本における多文化教育の問題点について中心的にお話いただきました。

とりわけ興味深かったのは、大阪府と京都府の小学校で「サラム」という副読本を使っているというお話でした。この

「サラム」という副読本には、韓国の遊びなど日常生活に密着した朝鮮文化が様々に説明されており、これを読んだ日本人の小学生が、異なってはいるが同じ人間の生活として、異なった文化伝統に心を開くように配慮されているようです。在日韓国・朝鮮人との関係においては、在日の側もそして日本人の側も、過去の植民地支配や強制連行などの歴史問題に焦点を当て、往々にして互いのナショナリズムが対立する閉塞状況に陥ってしまいがちです。もちろん歴史問題やナショナリズムの問題を多文化教育の中で扱うことも重要ですが、多文化教育がそれに尽きるわけではありません。むしろ多文化教育は、異民族や異文化に対して、ナショナリズムや民族の枠組みに捉えられる以前の人間の在りようとして、心を開くことを教えるべきなのでしょう。そのような地道な多文化教育の実践の積み重ねが、人間としての他者の立場に身をおいて考える想像力を培うのでしょう。

日本による朝鮮統治時代の創氏改名はもちろん、戦後における在日の人々が本名（朝鮮名）を伏せ、通称（日本名）によって生活せざるを得なかったことへの想像力を日本人が持つことはとても困難なことです。田中先生も言っておられましたが、日本人学生に尋ねると、現在では在日に対する差別はほとんどなくなったという答えがほとんどだそうです。しかしながら現在でも、留学生の下宿の保証人として在日韓国・朝鮮人を受け入れないという事例もあるそうです。かつての露骨な差別がなくなったとしても、差別している人間も気づいていない差別が存在し続けているということでしょうか。田中先生が話された最も印象的な言葉に「弱者は強者を理解するが、強者は弱者を理解できない」というのがありました。日本国家という制度の中で〈日本人〉というマジョリティとして生きる人間には、自らの行為がマイノリティにとってどんな意味を持つかを理解する想像力をもつことは困難です。だからこそマイノリティや弱者が声を上げる必要があるのですが、在日韓国・朝鮮人の場合に起こるように、日本国家に対する抗議の声は時に朝鮮民族・文化の美化や「本国の美化」といったナショナリズム言説に陥り、それが返って日本人が抗議の声を理解するのを妨げたりしています。弱者の「本国美化」が生じる原因は強者による差別にあるという認識をもつことはとても難しいことです。



講演で田中先生は在日韓国・朝鮮人の問題の他、中国からの帰国者の子どもたちや日系中南米人の子どもたちの教育問題にも触れられ、またかつて沖縄で行われた「方言札」による標準語の強制や北海道におけるアイヌ人差別などさまざまな事例について語られました。過去と現在を見つめるとき、日本における多文化教育の可能性をバラ色に描くことはできません。しかしながら、民族やナショナリズムの言説が強化されている現在こそ、私たちの隣に生きている〈他者〉を、異なった文化伝統を担って生きる個人として受け入れる想像力を養おうとする多文化教育の重要性は更に増していると言えます。

佛教大学では毎年2月に、近くの朝鮮人学校の生徒に大学を開放し、朝鮮文化を生活レベルで伝えるさまざまなイヴェントを行い、それを「ユーアイスクエア」（これは〈You & I〉であり〈友愛〉でもあります）と名づけているそうです。そのような地道な実践の積み重ねが日本の多文化教育を作り上げていくことが望まれます。

（人間文化研究科教授　別所良美）

研究所information *part1*

● **シンポジウム「韓国の少子化問題と保育・子育て支援を考える」**（日本福祉大学 21 世紀 COE プログラム）

日時：2007年2月10（土）・11日（日）　9：15～17：00　　**会場：**名古屋市立大学人文社会学部棟　201教室

シンポジウムⅠ：「韓国の少子化問題と保育・子育て支援の現状と課題」（2月10日）

報告（1）：金勝権（韓国保険社会研究院、社会政策本部長）「韓国の少子化の現状と課題」

報告（2）：金明順（延世大学教授）「韓国の保育・子育て支援の現状と課題」

報告（3）：呂順浩（京畿道庁・家族女性政策局長）「韓国の地方公共団体における保育・子育て支援の取り組みー京畿道の事例を中心に」

シンポジウムⅡ：「韓国の民間の保育・子育て支援の実践」（2月11日）

報告（4）：劉愛烈（三星福祉財団副理事長）「三星福祉財団の保育事業ー都市地域と低所得者層地域の保育」

報告（5）：鄭炳浩（漢陽大学教授）「共同育児運動ー父母と教師が子どもと共に作っていく協同組合オリニジップー」

参加費：無料　＊事前にお申込ください。**お問い合わせ：**日本福祉大学 COE 推進室　http://www.nihonfukushi-u.ac.jp/coe　参照

主催：日本福祉大学21世紀 COE 推進本部、**共催：**比較国際幼児教育研究会、**後援：**名古屋市立大学人間文化研究所

編集後記　愛知県知事選が告示されました。選挙になるといつも「選挙権欲しい、投票したい」と気持ちが高ぶります。投票率が悪いと「だったら私が代わりに投票するよ」なんて思ったり。でも、期待した結果になることはほとんどなく、結局、気持ちが萎えるのがいつものパターン・・・。さて、今回はどうなりますことか。　（S）

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第７回「 わかりあえないふたり 」　　赤嶺　淳（人間文化研究科助教授）

惨敗におわったが、昨年、わたしは、ある研究助成に応募した。国際捕鯨委員会（IWC）の決定をうけ、日本政府は 1987 年に商業捕鯨の一時禁止にふみきった。それから、20 年。この間の、捕鯨社会の変容を個人史の「束」として記録するとともに、元捕鯨者たちが IWC 主導の資源管理（捕獲禁止）をどのように捉えているか、を当事者の肉声をもとに検討したいと考えたからである。

不採択という結果に、異議をとなえるつもりはない。しかし、「クジラの研究者でもないのに、鯨類の資源管理？」との講評に、わたしは苦笑せざるをえなかった。「科学者ではないお前さんに、一体、なにがわかるんだい？　素人はだまっておいで」とでもいいたげなニュアンスを感じたからである。

たしかに資源管理の方程式は科学者が立案すべきであり、わたしのような地域研究者の出る幕はない。第一、わたしが関心を寄せるのは、捕鯨社会の「その後」なのであって、クジラでも数式そのものではない。鯨をとるのも人間ならば、その鯨をめぐる議論をおこなうのも、（科学者とはいえ）人間である。だからこそ、そこに文化やイデオロギーが介在し、科学じたいを相対化する余地がある。実際に IWC は 1990 年代以降、クジラの保護区をたんなるリザーブではなく、聖域（sanctuary）とよぶようになった。「神聖にして侵すべからず」というのである。ここには、クジラにたいするキリスト教的な価値観がこめられている。これに対し、日本ではクジラを敬うからこそ、勇魚(いさな)とよび供養はもとより墓を建ててもきた。

クジラとは経済的効果もカリスマ性もことなるものの、わたしは現在、ナマコをめぐるワシントン条約に関心をいだいており、同条約事務局が 2004 年にマレーシアで開催した会議にも参加する機会をえた。そこで体験したことは、わたしが捕鯨問題をレビューするなかで見聞きしたこととおなじであった。結果として事務局にはナマコの利用規制を主張する海洋生物学者と環境 NGO の意見ばかりが集約された。が、それも当然。消費者の代表はおろか、科学知のみに依存しない経験知をもつ漁業者は招待されてもいなかったからである。

異文化理解は、むずかしい。ここでいう文化とは、学問領域のことでもある。IWC もワシントン条約も、れっきとした国際条約である。だから、わたしひとりが異論をとなえたところで、その正当性がくつがえされることはない。ナマコは今年 6 月にオランダで開催される締約国会議でなんらかの規制がかかることが予想される。そうなれば、日本をはじめ東南アジアの沿岸漁民たちは生活設計の変容を余儀なくされる。わたしは、同会議に参加し、ナマコが規制される瞬間を看取るつもりであるし、ポスト・ナマコ時代の漁民たちの暮らしぶりをウォッチしつづけるのが、地域研究者のつとめだと覚悟している。

研究所information *part2* ＊詳細は変更されることがあります。最新情報は人間文化研究所ホームページにてお知らせします。

● 公開シンポジウム 「山村の開発・環境と地域文化」

日時：2007年3月16日（金） 13:30～
会場：名古屋市立大学人文社会学部棟　203教室（予定）
報告１：白水智（中央学院大学助教授）
「山村の生活文化と現代」
報告２：脊古真哉（名古屋市立大学非常勤講師）
「白山をめぐる地域の宗教文化とその変貌」
報告３：吉田一彦（名古屋市立大学人間文化研究科教授）
「ダムの開発と文化財―本年度の調査から―」
お問い合わせ先：名古屋市立大学大学院人間文化研究科・吉田一彦研究室（tel:052-872-5183）
yoshida@hum.nagoya-cu.ac.jp
主催：名古屋市立大学人間文化研究所
＜名古屋市立大学特別奨励研究費採択事業＞

＊中面３ページの研究所 information　part1 もご覧下さい。

● 公開講演会 「どうなる、どうする、特別支援教育」

日時：2007年2月17日（土） 13:30～16:30
会場：名古屋市立大学人文社会学部棟　201教室
講演１：越野和之（奈良教育大学助教授）
「どうなる、どうする、特別支援教育
―特別支援教育研究の視点から―」
講演２：竹沢清（愛知県立聾学校教諭）
「特別支援教育で現場はどう変わるか？」
お問い合わせ先：名古屋市立大学大学院人間文化研究科・成玖美研究室（tel:052-872-5154） sung@hum.nagoya-cu.ac.jp
主催：名古屋市立大学特別研究奨励費「特別支援教育」に関する支援プログラム開発研究会　**共催：**東海地方 K－ABC 研究会　**後援：**名古屋市立大学人間文化研究所
＜名古屋市立大学特別奨励研究費採択事業＞

名古屋市立大学
人間文化研究所